

南蛮屏風の黒人図像

— 視覚イメージの存在と研究言説における不在をめぐる —

萩原 弘子 (大阪府立大学教授)

「南蛮屏風」と呼ばれる作品群が作成されるようになったのは、キリスト教宣教師とポルトガル人商人の日本渡来が始まって40年程のちの16世紀末である。当時の異文化交流の産物とするのが、ごく一般的な見方だろう。ではそこで想定されている異文化交流とはどういうものだろうか。南蛮屏風について言われる異文化交流に疑問を投げ、別の視点で南蛮屏風を見る可能性を考えてみようというのが、本稿での私の試みである。

日本美術の専門家でもない私が南蛮屏風に関心をもつようになったのは、美術作品のなかに表現された黒人図像に関する英語圏での研究に促されてのことだ。¹ 黒人図像といえば、南蛮屏風にも描かれている。それは見る者にどういう意味を伝えるイメージとして機能してきただろうか。私はそういう関心をもって、屏風所蔵館を訪れ、関連する書物や研究論文のあれこれを読むようになった。文献を渉猟してみてもすぐに気づいたことがある。屏風に描かれている視覚イメージと、南蛮屏風研究とのあいだに重大なギャップがあるのだ。つまり、南蛮屏風にはかなりの数の黒人が描かれている一方で、南蛮屏風を論じる文章には、ちょっとした図版解説のレベルから、大部の画集や本格的な総目録、学術研究論文のレベルにいたるまで、黒人図像への言及がほとんどと言ってよいほど存在しない。南蛮屏風における見逃しがたい視覚的な黒人図像の存在と、研究言説における黒人の不在とのギャップは、何を意味するのだろうか。いったい屏風に描かれた彼らは誰であり、何者なのか。また南蛮屏風研究言説における黒人の不在の理由は何か。そして言葉では言及されないなかで、視覚イメージである黒人図像がもった機能はどのようなものか。

ロバート・ギャロのHTLV/HIVアフリカ起源説と南蛮屏風

そうした問いを追究していくにあたって、まず注目しておきたい奇妙な医学論文がある。1983年10月、医学研究学術誌として知られる『ザ・ランセット (*The Lancet*)』にロバート・ギャロが編集者に宛てた書簡が掲載された。ギャロは、アメリカ国立癌研究所 (メリーランド州) の腫瘍細胞生物学研究所主任研究員の職にあり、ヒトT細胞白血病リンパ腫ウィルスの専門家として知られる。

ギャロの書簡は、アメリカ白人の一部、西インド諸島黒人の一部、南米人、そして日本人の成人T細胞白血病 (ATL) 患者にヒトTリンパ好性ウィルス (HTLV) が確認されていることから始めて、同ウィルスの起源について考察をめぐらせている。彼は、同ウィルスがアフリカではいたるところに確認できる一方で、それ以外の地域、ならびに西ヨーロッパ、北アメリカの健康な白人には稀であるとしたうえで、HTLVの高浸淫地域として日本の九州南西部、四国を挙げている。そして日本人研究者の成果として、日本サルならびにアフリカ緑サルに近似ウィルスを発見したことに触れ、動物からヒトへの媒介種をサルであろうとしている。そこから、ギャロは、アフリカ人にHTLV感染が多いこと、アフリカに旧世界霊長類が多いことを考えると、早くに同ウィルスに感染したのはアフリカ黒人だったと結論する。² ギャロの書簡は、日本の高浸淫地域について次のように述べている。

「日本人は、サルからヒトへの感染を媒介するもうひとつの媒介種を経由してHTLV保有者となったのかもしれないが、しかしそれでは感染者が九州と四国の海岸・港湾地区に著しく集中していることの説明はつかない。日本人研究者イトウ

(京都)との共同研究で私たちが解明したことによれば、同ウイルスに感染した日本サルはこの地域だけにいるわけではない。地勢気候学的要素も、この地域的限局を説明すると考えられようが、それだけでは不十分だと思う。というのは、似たような海岸地域は近隣にあるが、HTLV感染ははるかに少ないからだ。興味深い可能性として付加したいのが、HTLVは16世紀に、ポルトガル人探検家ならびに船員が日本にもたらしたのかもしれないということだ。彼らはそれまでにアフリカを訪れていただけでなく、現在日本でHTLVの高比率が認められる地域にやってきて、在住したからである。」³

この書簡が発表された翌年、ギャロは、パストゥール研究所のリュック・モンタニエが発表したばかりのヒト免疫不全ウイルス(HIV)発見に疑義を表明し、同ウイルス発見の栄誉をめぐって大論争を起こすことになる。ギャロのチームはモンタニエよりも5ヵ月早くHIV抽出に成功し、HTLV-Ⅲと呼ぶことを決めていたが、公表を阻まれたというのがギャロの言い分であった。メディアの注目を浴びたこの事件は、結局、両者ともを発見者とし、以後それをくつつがえす主張はしないという合意らしきものに達したようだ。培養基の共有もしていた両者のあいだの論争とその顛末の真相は藪のなかである。⁴ 1983年書簡で言及されている或るタイプの白血病を起こすレトロウイルスは現在ではHTLV-Iと呼ばれる。その起源をアフリカに見ようとするギャロは、近似性をもつレトロウイルスであるHIVの起源をアフリカにありとする議論の流れのなかでも先頭にいとされる。⁵

そのギャロが、1986年12月と87年1月の*Scientific American*誌に、レトロウイルスに関する2部構成の論文を発表した。第1部は「最初のヒト・レトロウイルス」と題され、HTLV-Iを論じている。そのなかでギャロのチームによる1978年のHTLV-I発見、82年のHTLV-II発見を、「AIDS発症に責任のある関連ウイルス発見の基盤となった」と位置づけている。⁶ 第2部は「AIDSウイルス」と題され、83-84年に彼らが発見した3番目のヒト・レトロウイルスHTLV-ⅢであるHIVを論じている。そのなかで、1985年に発見されたアフリカ緑サル保有のSTLV-IIIがHTLV-Ⅲに極似であるとし、サルに発症することはないが、それがヒトに感染したかもしれないと言っている。そこからさらに

「かもしれない(may, might)」という非確定的な文体を重ねた末に、HIVの拡大経路をアフリカからハイチを経由してヨーロッパ、アメリカへと説明して、結局AIDSアフリカ起源を主張している。⁷

ギャロは、その2部構成の論文の第1部に、南蛮屏風を挿画として掲載している。ワシントンDCのフリーア美術館所蔵の6曲1双のうち、右隻の中央部、第3面と第4面で、黒人使用人がポルトガル商人のために大きな日傘をさしかけている場面だ。⁸ その図版キャプションで、ギャロは次のように言う。

「ポルトガル人商人が、彼らの連れてきたアフリカ人奴隷またはサルによって、HTLV-Iも日本に持ちこんだということはあるかもしれない。16世紀にポルトガル人航海者は、何度も日本を訪れた。この図版は、そういう訪問を描写した当時の日本の美術品である。左にいるアフリカ人は、会話を交わす2人のポルトガル商人に傘をさしかけている。ポルトガル人との接触は、日本の南端島に集中していた。1978年、新型のT細胞悪性腫瘍が同地域で確認された。それが成人T細胞白血病(ATL)であり、HTLV-Iとの関係性が強い。」⁹

挿画に対応する本文部分では、HTLV-Iのアフリカ起源説が次のように展開されている。

「16世紀、ポルトガル人商人は日本を訪れ、現在HTLVが浸淫している地域に在留した。当時の日本の美術品が示すように、彼らはアフリカ人奴隷とサルを連れてきた。そのいずれかが、ウイルスをもたらしたのかもしれない。この仮説に突きつけられたのが、彼らが行かなかった日本北方の島、北海道のアイヌにもHTLV-I感染が認められるという発見だ。しかし、いまのところ、このウイルスの地球規模の拡大の説明としては、やはりこの仮説は妥当なものである。」¹⁰

アイヌにも感染があると言った段階で、ギャロの仮説はすでに破綻しているが、それに頓着するふうでもなく、強引にHTLV-Iのアフリカ起源を言いつづけている。要するに、ギャロは、HTLV-Iがアフリカ起源であることの蓋然性の高さを言うことで、HIVのアフリカ起源の蓋然性を言う論者であり、その傍証として南蛮屏風を使っている。

この仮説は、ギャロだけのものではなく、日本のHTLV-I研究者のあいだでも共有されている。たとえば、1984年9月に*The Lancet*に掲載された長崎大学医学部の日野茂男たちの書簡がある。¹¹「HTLVと長崎におけるキリスト教宣教」と題されたその書簡は、長崎県内の諸地域における成人T細胞白血病・リンパ腫(ATLL)患者150人の分布と、カトリック教徒(キリシタン)分布の相関性を根拠に、16世紀のキリスト教宣教をその感染機会としている。そして日本のほかのHTLV-I浸淫地域も、16世紀にキリスト教宣教師が行った地域と重なっていることを、次のように言う。

「ポルトガル人キリスト教宣教師は鹿児島から始めて、1544年から75年までに大分、愛媛、高知と布教を進めた。これらはすべて、HTLV浸淫地域である。このように、日本南西部におけるHTLV-Iはおそらく、ポルトガル人ないしは彼らの連れていたアフリカ黒人が直接にもたらしたものである。」¹²

上記ではポルトガル人も可能なキャリアーとして並べられているが、先行する文章では、現在ポルトガル本国ではHTLV-Iの感染が見られないのに対して、アフリカでは数多く確認されているのだからとして、日本へのウィルス搬入者としてアフリカ人のほうがより可能性が高いことを印象づけている。¹³

ギャロたちの矛盾

HTLV-Iは成人T細胞白血病のほかに、痙性脊髄麻痺、ぶどう膜炎、シェーグレン症候群などの自己免疫疾患病態に関与し、長崎県はたしかにその高浸淫地域である。¹⁴しかし、それが16世紀以前にさかのぼらないという証拠もなければ、16世紀よりも後年に出来た事態でないという証拠もなく、ましてやアフリカ人が主たる感染源であるという証拠はない。

そもそもHTLV-Iのアフリカ起源説を言うギャロの議論には根本的な矛盾が含まれている。ポルトガルによる奴隷貿易は、大西洋諸島にアフリカ人奴隷を運んで農園労働につかせていた15世紀半ばから、イギリスが廃止を決めた19世紀初頭よりかなり後の密貿易時代まで、およそ400年の長きに及ぶ。大西洋奴隷貿易の中心は、初期のポルトガルからやがてイギリスへと変化するが、どこかの船が運んだにせよ、この間にアフリカから「新世界」に運ばれた者は、1100万人を

下らないとされる。¹⁵ 奴隷とされて連行されたアフリカ人の子孫が南北アメリカの各地にいることは、だれもが知っている。もしギャロや上述の日本人研究者が言うように、HTLV-Iがアフリカでサルからヒト(アフリカ人)に感染し、アフリカ人の世界規模の移動とともに感染が拡大したのであれば、最も多くアフリカ人が連れて行かれ、彼らとの長年にわたる「混血」が進んだ南北アメリカこそは、HTLV-Iの浸淫の度合いがとりわけ高い地域となっているはずであろう。特に「混血」が、奴隷管理ならびに次世代労働力確保のための有効手段であった強姦によって積極的に生みだされた歴史を考えれば、世代を次いでレトロウィルス感染は、人種を越えて広がっているはずだ。

また日野たちが、キリスト教信徒人口が集住する地区における感染の高さを根拠として、16世紀のキリスト教宣教(南蛮貿易)時代に感染が起きたとし、アフリカ人にウィルス搬入の責任を見る論は、患者数150の分布に関するもので、キリスト教宣教との相関性を言うにはサンプル数があまりに少ない。日本におけるHTLV-I浸淫地域の限局性と、アフリカ人との接触機会があったと考えられる16世紀キリスト教宣教の時代的、地理的限局性とを結びつける論理だが、それが近代アフリカ人奴隷貿易・奴隷制の規模とも世界性とも矛盾する点が、ギャロとの共通点である。

その矛盾は、日本における南蛮屏風研究の世界でも問われることがないばかりでなく、南蛮屏風研究の基本的枠組みを成しているとは私は見ている。矛盾の根源には、16世紀から17世紀にかけて行なわれた南蛮貿易を、日本とポルトガル、日欧という2極間の交流、あるいは東洋と西洋と広く言ったところでやはり2極間に変わりはない交流と捉える視点がある。

近年行なわれた南蛮美術を展示した主たる展覧会のタイトルには、そうした2極間の異文化交流という視点がよく表われている。たとえば、『西洋との出会い——キリシタン絵画と南蛮屏風』(1986年)、『南蛮見聞録——桃山絵画に見る西洋との出会い』(1992年)、『家康の生きた時代——東と西の出会い』(1997年)、『航路アジアへ——鎖国前夜の東西交流』(1998年)、『南蛮——ヨーロッパ世界との交流』(2002年)、『南蛮——東西交流の精華』(2003年)、『南蛮——信長・秀吉・家康のみた東西交流』(2003年)などである。¹⁶

ギャロの場合は、日欧2極間の交流にひっぱりこまれたアフリカ人の存在に注目したわけだが、日本における南蛮屏風研究の言説では、ひっぱりこまれたアフリ

リカ人は周縁に留めおかれて、ほとんど言及されない。この日欧交流という視点こそは、屏風に描かれた黒人図像を不可視化するものだと私は考えている。その不可視化のメカニズムと機能とはどのようなものだろうか。

それを論じる前に、まずは南蛮屏風に描かれている黒人図像がどのようなものか、次に例外的に黒人図像に言及している南蛮屏風研究の記述とはどのようなものかを見ておきたい。

見逃しがたい黒人図像

南蛮屏風における黒人図像の存在は視覚的に見逃しがたい。なにより、かなりの人数が描かれている。6曲1双のそろった代表的作品中に描かれた総人数中の黒人数を数えてみると、次のようになる。

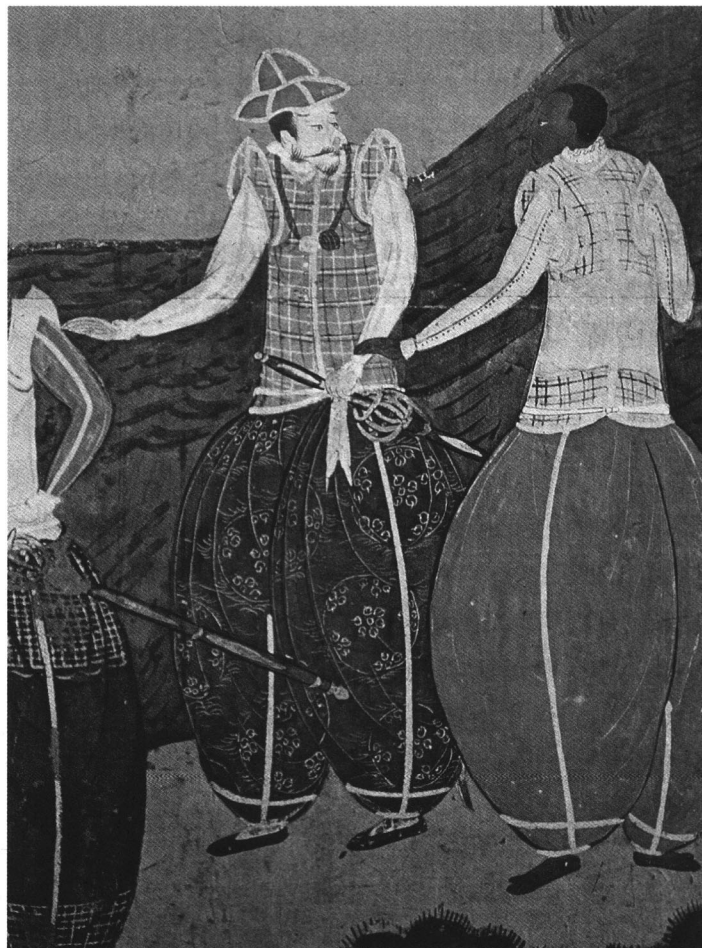
大阪南蛮文化館所蔵品	136人中41人
フリーア美術館所蔵品	113人中26人
サントリー美術館所蔵品	119人中26人
神戸市立博物館所蔵品	218人中67人 ¹⁷

このうち大阪南蛮文化館と神戸市立博物館の2本で

は、それぞれに描かれた黒人数は3割を越える。4本をまとめて言うと、586人の人物中の160人が黒人、つまり4分の1を越える数である。

この4本にかぎらず、南蛮屏風に登場する黒人の圧倒的多数は、はっきりと使用人である。粗末な服装、無帽、裸足で、荷降ろし、荷づくり、運搬、給仕、船員業務、馬子、駕籠かき、動物の世話、日傘もちなどの労働に携わる。彼らがポルトガル人に仕える使用人であるという階級序列についての認識が描く側にあったことは、着衣を描きわけていることからわかる。ただし例外的に、身なりのよい黒人商人が黒人使用人を連れて屋内で反物商売をしている場面を描いたものもある。¹⁸

南蛮屏風には、先行する南蛮屏風の構図や人物像を下敷きにしたことがわかる事例は数多くあり、特に江戸時代に入って制作されたものの中には活力のない模写画という印象のものもある。しかし、アフリカ人の顔の造作をよくとらえた描写もあるし、労働する者を活写する画家の技量が確認できるものも多い。写生という概念がなく、手本の模写が作画の基本であった時代、いったい画家たちがどうやって、黒人を含めて



「南蛮人来朝之図」(左隻 部分)
長崎歴史文化博物館蔵

異人の姿を描いたのかは謎が多い。¹⁹ おそらくは画家一門に継承、蓄積されてきた中国、朝鮮からの文物や粉本などから、「胡貌梵相」と中国語に言うさまざまな異人の相貌が選りとりされ、組み合わせられたものと推測される。また南蛮貿易で入ってくるようになった舶載銅版画も手本としたとされる。²⁰ 他方で、世界のどこにも類似の図像が見あたらず、屏風画家たちの個に発する創意の発揚と考えられる描写も各所に見られるという。²¹ こうした南蛮屏風を構成するさまざまなモチーフが、「流用・歪曲・創造」といった過程を経て形成された系譜については、坂本満氏が「日本美術」というナショナルな枠をとりはらって豊かな事例検証を重ねておられ、学ぶところが多い。²²

さて屏風中の黒人図像は、上記で示したように、描かれた人物中に占める人数から考えても、また南蛮貿易のなかで彼らがになった仕事の重要性から考えても、さらには異人のいる光景を描く際の効果から考えても、南蛮交易の図を成立させるうえで不可欠のものであったと言えよう。南蛮屏風は、海外との交易を描いたエキゾチックで賑やかな6曲1双の図を所有したい階層に向けて制作された。来歴の明確な屏風は、松前、高岡、敦賀、松江といった港町や堺周辺の町家から出たことから、注文主ないしはレディメイド品の購入者は商家、それも廻船、通商を業とする家を中心であったという。²³ 家業の繁盛を願い、屏風を購入して南蛮趣味を愉しむ余裕がある社会階層の期待に向けて、画家が屏風に描いた意味世界のなかで、黒人使用人の存在は小さくなかったはずだ。画家は、異人たちのあいだに主従の関係があることを見てとり、それを視覚的に構成して、主人は主人として、使用人は使用人として描き、主人と使用人のあいだに人種的違いのあることも描いた。黒人使用人の図像なしには、顧客層の期待する珍しさと驚きに満ちた海外通商の賑わいというスペクタクルを現出させることはできない。画家たちにとって黒人使用人の図像は、南蛮交易の図をそれらしく描くうえで必須の重要素であった。そう考えると、南蛮屏風研究の言説における黒人の不在は、重大な欠落だと思われるのである。

黒人図像への言及の例

黒人図像に言及したいいくつかの例外はある。しかしそれらは、上で私が述べたような意味で、黒人図像に重要な位置を与えるものではない。では、どのような関心から黒人図像がとりあげられているのだろうか。

私が眼をとおした南蛮屏風研究は、1923年のヨゼフ・ダールマンによる『史学雑誌』論文をはじめとして、1930年代から現在までの『国華』掲載の解説や論考、『日本の美術』、『古美術』、『美術手帖』、『大和絵研究』各誌の関連特集号掲載の解説や論文、国立情報学研究所のデータベースの「南蛮屏風」「南蛮美術」検索であがった大学紀要掲載論文など、約80点、そして戦後刊行の主要な展覧会図録と画集といったものである。博捜を心がけたが、むろん遺漏は避けられないだろう。それでもこれだけを読んだなかに、黒人図像に一定程度の焦点をあてた論考が数点というのは少ないと言えることができるだろうし、南蛮屏風という視覚的作品を論じるうえで重要素とはされていないことは明らかである。

とりあげたい論者は3者であり、それぞれに言及のしかたは異なる。

第1は、岡本良知が1941年に発表の論文「南蛮屏風の異国的内容」において、画中の黒人を奴隷であると明言したうえで（そう明言しない論考が多い）、彼らの服装とスキンカラー、エスニシティ、仕事などを記述しているものだ。「無帽無剣無髭にして粗い縞柄の衣服を着けて、前者（ポルトガル人）に扈従し、または荷揚げや船内の操作に従ふ」奴隷は、アフリカ黒人、インド人、マレー人、中国人などだろうが、どこの国の者かは関係なく、主人の風俗文化に同化させられていると言ひ、植民地主義的な主人・奴隷関係の表現を確認している。²⁴ 信長、秀吉が「黒坊主」の容貌に好奇心をもったという記録にも触れている。後年の南蛮屏風研究に比べれば、それなりに頁数を割いての記述である。岡本はそもそも「南蛮屏風」という作品群の枠組みをつくった人物であり、²⁵ 大著『日欧交通史の研究』（1936年）で知られる歴史研究者だ。岡本の視点は、彼自身が「美術史の見地を離れて、歴史検討をなす」と言っていることからわかるように、²⁶ いわば日欧交通史の傍証として屏風を見るというものである。

第2が、1984年の日埜博司の論文「南蛮屏風にあらわれたる南蛮人について」で、視覚表現の差別性・無差別性を論じる際の言及である。大阪南蛮文化館所蔵の1本についてだけの議論なので一般性はないのだが、黒人図像を論じるときに陥りがちな問題ある記述の例として見ておきたい。日埜は、画家が南蛮船、天主堂、ポルトガル商人の一行を長崎で見聞して写生したものとしており、²⁷ そのうえで黒人たちに対する偏

見が見られないとしている。日笠も岡本と同様、彼らが奴隷であると明言して、その社会的地位に言及している数少ない論者である。日笠の議論の中心は、視覚表現の差別性である。大航海時代のポルトガル人による記録（こちらは視覚的なものでなく文字テキスト）と比較し、彼らの描写するアフリカ人像は偏見からくる罵詈雑言に満ちているが、日本人画家の描写は違うと言う。

「その表情はいたずらに明るく、肢体は健康的で力強く、動作は躍動感にあふれているではないか。これを描いた日本人画家に、当時のヨーロッパ人が抱いたような人種的偏見などおよそ皆無であったことを物語るなによりの証左だと思う。」²⁸

ポルトガル人の悪意に対照させて日本人の善意と無邪気を日笠が強調する根拠は、人物の容貌、体軀、所作の描写についての印象的判定でしかない。視覚的な黒人イメージに関する研究の積み上げに学んで言えば、明るく健康的で躍動感にあふれているように描いたからといって、黒人に対する偏見の無さを証しているとは限らない。むしろ、黒人（奴隷）が複雑な人間性を有することへの無理解の証左であるという場合も多い。16世紀の日本の画家はと考えば、日笠の言うとおり偏見をもたなかった一方で、理解もなかった、ということだってあるかもしれない。いずれにせよ、判定の根拠は、図像のなかにではなく、図像をつくりだした画家をとりまくさまざまな歴史的、社会的文脈に求めるべきものだ。しかも、そうした図像の差別性の有無に関する判定は、南蛮屏風についての理解を進めるうえで、あるとしてもごく小さな意味しかもたない。

とにかく屏風中の黒人図像に対する日笠の関心は、16世紀の画家が人種偏見を持っていたかどうか、その表現がマルカバツかというものである。

第3に挙げたいのは、ごく最近の科研費助成研究の報告書で泉万里が論じる異国人表現である。初期南蛮屏風2本に描かれた異国人の表現について、泉は容貌と装束・持ち物に注目して分析している。「暗色の肌の従者」の顔の造作、装束の模様、色、持ち物の形状などに関心を注いで細かく記述している。泉の結論は、初期南蛮屏風においては混沌として豊かな多様性が見られるが、画家の試行錯誤も落ち着く後年には画一的な図像へと整えられていくというものだ。²⁹ その分析

に異論はない。私が指摘したいのは、ここで泉がしているような、屏風に何がどう描かれているかといった基本的なことを確認する記述が、これまで黒人図像については行なわれてこなかったということである。

以上が、黒人図像への数少ない言及であり、こうした例外的記述もまた、南蛮屏風研究言説における黒人の不在の証である。

16世紀世界のポルトガルによる奴隷貿易

南蛮屏風に描かれた視覚イメージのスペクタクルを16世紀後半の世界史のなかに置いて見ると、たくさんの黒人が立ち働く光景がもつ意味の世界性が理解できる。

15世紀以来、ポルトガルの交易網は世界に広がっていた。ポルトガル人が日本にやってきた1540年代から鎖国令前後の1630年代までといえば、西半球ではブラジル植民地拡大期であった。1540年代に大西洋のマデイラ諸島から砂糖栽培技術を導入し、1550年代から入植が本格化したブラジルでは、それまでの約100年間に大西洋諸島植民地で行なっていた奴隷労働による砂糖きびプランテーションの経験に立って、より大規模な奴隷プランテーション農業を行なうようになる。同じ1550年代、フランス、オランダがブラジルに意欲をもっていることを警戒するブラジル植民地総督府は、創設まもないイエズス会を特段の好条件で招聘し、学校、病院を設立させ、入植者の定住化推進をはかった。³⁰ 南蛮屏風には日本に上陸したカピタン・モール（船長兼政治・司法権限を有するポルトガル国役人）が、在日するイエズス会士と挨拶していると思われる場面を描いたものが多い。西でも東でも、ポルトガル国とイエズス会は密接な協力関係にあった。ブラジルは16世紀半ばからの数10年で砂糖植民地として飛躍的に発展し、1640年代には大幅な生産拡大と販路独占により、ヨーロッパが輸入する砂糖の8割を占めるまでになる。³¹ その生産は圧倒的にアフリカ人奴隷の労働に依存していた。

近代奴隷貿易と言えば三角貿易を組織化したイギリスをすぐ思い浮かべるが、「新世界」がヨーロッパに知られる以前から、ポルトガルは西アフリカ沿岸を南下し、沿岸各地での交易や略奪で集めた奴隷を大西洋諸島植民地に送っていた。奴隷貿易に関する数量的研究は近年めざましい成果をあげているが、そうした成果を見ると、17世紀も半ばまでの大西洋奴隷貿易はほぼ独占的にポルトガルの事業であったとわかる。ま

た、16世紀から19世紀後半までの350年間にわたる各国の通商奴隷数を比較すると、圧倒的に多いのがポルトガルで、総数の半分近くを運んでいる。奴隷通商史を研究するデイヴィッド・エルティスは、航海記録の調査にもとづいて通商総数を1106万人とし、そのうちの46%、507万人がポルトガル商人によって運ばれたとしている。³²

こうして西半球では、アフリカから連行された奴隷を労働力に使う商品作物生産をする植民地開発が行なわれた。それに対して東半球では、ポルトガルがやってきた16世紀にはすでに生産の組織化が各地でなされ、海洋貿易もインド、イスラム商人が商圏を確立していた。ポルトガルをはじめとする西洋勢力は、そうした既存の商圏に食いこみ、東半球で生産される商品の通商権をめぐる競争あうことになる。

1510年にゴアを占領したポルトガルはそこに副王を置き、さらに1511年にイスラム勢力から奪取したマラッカ、1513年に到達したマカオ、さらにはリャンポーなどを貿易拠点として、インド洋と東南アジア、東アジア各地との中継貿易を行なった。日本へは、1543年に倭寇王直の中国船がポルトガル人を乗せて種子島に漂着したのち、1550年におそらく王直の縁でポルトガル船が平戸に入港した。こうして始まった通商関係は、1639年にポルトガル船入港禁止を家康が決めるまで続く。³³ 日本に来たポルトガル船はまずはリャンポー、その後1560年代に入ってからマカオを拠点とし、明が対日海禁（鎖国）の時代に中国産生糸を日本に売る中継貿易を行なった。その貿易が「南蛮貿易」の名称にそぐわない性質のものであったことを、角山榮は次のように言っている。

「やがてポルトガル人が渡来して日本商人と商取引を行うようになる。それを日本では南蛮貿易と称した。ところが南蛮貿易の主軸を占めた貿易品は、彼らがポルトガル本国や西洋から持ってきたエキゾチックな商品ではなかった。確かに彼らはキリスト教とともに機械時計、印刷機、ピオラ、ハープなどの楽器その他ワイン、ビスケット、パンといった食料品、毛織物などの衣料も日本にもたらした。しかし南蛮貿易の主軸は、実は中国産の生糸・絹織物、東南アジア産の麝香、伽羅、蘇木といったアジア物産であった。だから南蛮貿易といっても、実態はアジア内貿易ネットワークにポルトガル人が第三国貿易として参加し、その貿

易から巨大な利益をえていたアジア貿易であった。」³⁴

ポルトガル商人との取引は、貿易品の内容からすればアジア貿易であり、通商範囲は東アジア、東南アジア各地をつなぐ多極的なものだったというわけだ。たしかに南蛮屏風に荷揚げ品、陳列品として描かれている物品、動物は、多極的アジア貿易の現実を伝えている。

ポルトガル商人が日本に運んだもので、角山が触れていないのが奴隷である。来日開始の時点で、ポルトガルにはすでに遠洋奴隷貿易100年の歴史があった。上述したように、ポルトガルは、東半球では生産支配ではなく、海洋通商権を既存勢力から奪取することで覇権構築をめざしたので、西半球でしたような大規模な強制的労働力移動は行なわなかった。しかしそもそも家僕、小企業の使用人、下級船員などの労働力売買が行なわれていたアジアにやってきて、その貿易ネットワークに割って入ってきたとき、その道で練達のポルトガル商人は当然ながら労働力売買にも携わった。したがってポルトガル商人は日本人労働力を海外に売ることもした。晩年の秀吉が大いなる危機感を抱いていたのは、ポルトガル商人による日本人奴隷売買であった。

日本人奴隷売買については後述するとして、本論冒頭の問い、つまり、南蛮屏風に描かれた黒人たちが誰であったか、何者なのかという問いの答えはもう明らかだろう。彼らはなんらかの拘束身分の使用人、つまり売買される労働力、要するに奴隷であり、その出身地はポルトガル海洋帝国の広がりから推してさまざまであった。彼らが南部アフリカのリュアンダ（アンゴラ）、ロレンソ・マルケス（モザンビク）やモザンビク島から直接連れてこられたアフリカ人だったということも考えられるが、より現実的なのは、生来からポルトガル人の奴隷という身分にあった者だ。つまりアゾレス、カポ・ヴェルデ、サン・トメなどの大西洋諸島のポルトガル植民地生まれ、あるいはゴア、マラッカ、マカオなど、ポルトガル人が拠点を築き在住していた土地で生れたアフリカ人、インド人、東南アジア人の奴隷で、多くの場合、主人と同じポルトガル語を話す者たちだ。

日本からの奴隷輸出という問題から見えること

ポルトガル人が日本から連れ出した奴隷は、その姿が南蛮屏風に描かれているわけではない。しかしその

問題は、屏風が制作された16世紀後半の日本を世界史のなかに置いて見るうえでヒントを与えてくれるので、その目的に資するかぎりで言及しておきたい。

前出の岡本良知が、1930年代に発表した『日欧交通史の研究』ならびにそれに先行する論考で、16世紀のポルトガル人商人による日本人奴隷売買の問題を論じている。奴隷は古くから日本において種々のかたちで存在したし、奴隷の国外船載は、ポルトガル人の到来以前にもあった。しかし16世紀後半に連れ出された数は為政者の注意を引くほどであり、また東南アジア各地、さらにはポルトガル勢力の及ぶ遠方まで売られたというのも未曾有のことであった。³⁵ ポルトガル王、秀吉、在日本イエズス会、ゴア市奴隷所有者がそれに対してどういう姿勢をとったかを、岡本の記述に見てみたい。

ポルトガル人による日本人奴隷売買に関する文書で最も早いものとして岡本があげるのが、1570年3月にポルトガル国王ドン・セバスチャンが出した日本人奴隷売買禁止の勅令である。遠く本国の王が勅令を出したのは、在日本イエズス会からの要請があつたこととされる。勅令は、ポルトガル人に日本人売買を禁じ、日本人を捕捉、購買した者は財産没収の罰に処し、日本人奴隷は解放しなければならないと定めたものだ。世界規模で奴隷貿易を行っていたポルトガルが対日通商に限って出した奴隷貿易禁止令である。しかも、アジア各地に需要があり、すでに確立した通商ルートがあり、人々を身売り・子売りに追いやる貧困があり、ポルトガル商人に日本人を売る日本人商人がいて、それを九州諸侯が認めていれば、本国の王の勅令など効果のあるはずがなかった。³⁶

1587年、九州統一を果たした秀吉は、売買される日本人奴隷の窮状を聞いて激怒し、在日本イエズス会に警告を出した。日本人奴隷を帰国させることを求め、遠方でそれができないなら現地で解放せよというのが秀吉の要求であった。それに応えて、在日本イエズス会の副管区長パードレ・コエリョは、イエズス会としてポルトガル人の日本人売買阻止に努力すると約束した一方で、秀吉には臣下にその交易を禁ずるための有効な措置を講ずるよう進言したという。³⁷ 秀吉は、ポルトガル人との奴隷売買に関わった日本人は死刑に処すという禁令を出すか、ポルトガル船の来航がなくなるのを怖れてか、禁令はポルトガル人には適用されない不徹底なものであった。³⁸

在日本イエズス会はいえ、少なくとも2度にわ

たってポルトガル人による日本人売買禁止を決める決議書を出し、売買に携わった者は破門の厳罰に処するとしている。しかしその反対の姿勢は人道的なものとは言えず、政治的、宣教的な配慮から出たものであった。1598年に出された破門令決議書には、かつては在日本イエズス会自身がポルトガル商人の集めた少年少女の国外労務契約に認可を与えていたこともあったとしたうえで、その後国情に通じるようになってからは禁止に努力してきた経緯が記されている。つまり、イエズス会自身が奴隷売買に関与していた。日本人奴隷売買に反対する同会の姿勢は、現地為政者の不興を買っては宣教の障害になるからという、あくまでも戦略的なものでしかなかった。³⁹

この1598年の破門令決議書と、それ以前の本国王の勅令に反対して、日本人奴隷の所有者であるゴア市民（ポルトガル人）が1603年、1605年に直訴状を出している。2つの訴状は、ゴアの副王に勅令実施の撤回を交渉したが入れられなかったため、本国王に直接訴えたものだ。それによれば、奴隷は在日本イエズス会のパードレが承認した正当なる善意の契約で手に入れた財産であり、その解放を命ずることは神の掟にも人間の法則にも反する。1605年、本国王は曖昧な返答をすることで、ゴア市民の訴えを認めた。つまり適法に善意で所有している奴隷に対してまで先の勅令を適用するつもりはないとしたのである。⁴⁰

以上、岡本の言及する歴史事象を見ると、奴隷適法の主張はもちろんのこと、禁止令、破門令もまた当時のアジア内奴隷貿易の多極的な広がりや公的陣営の関与の深さを示唆している。それらは、岡本が立てる「日欧交通史」という2極的な枠組みには収まらない。ポルトガル国王と在日本イエズス会は、現地政治権力と「国情」への配慮から戦略的妥協として日本人奴隷売買に反対するポーズをとったが、西半球では両者手を携えて奴隷帝国を築いていたわけで、奴隷という商品の取引を根底から否定する原理はもたない。当時奴隷は重要な世界商品であり、その通商の独占と効率化は、いずれの列強にとっても、また秀吉を含むローカルな権力者にとっても、それぞれの大小覇権を構築するための鍵であった。1598年の破門令決議書にも少々の言及がある、ポルトガルの関与しない2件の出来事は、日本もまた大小覇権が競いあう現場であったことをよく示している。ひとつは、1596年のサン・フェリペ号事件である。⁴¹ 土佐浦戸に漂着、座礁したスペイン船サン・フェリペ号の積荷を秀吉が没収した

ことに始まり、乗船していた修道士を含むキリスト教徒26人が磔刑に処せられたために、いわゆる26聖人殉教として知られる事件だ。没収と磔刑は、秀吉にとりいろいろとするイエズス会ならびにポルトガル勢力の計略であるとするスペイン側に対して、イエズス会は、同会修道士も磔刑になっているのだからと反論した。サン・フェリペ号は、フィリピンからヌエバ・エスパーニャ（メキシコ）に向けて航海する途中で台風に遭って日本に漂着したもので、その積荷には数百人の奴隷を含んでいた。⁴² その30年前、スペインがフィリピンとヌエバ・エスパーニャ間の太平洋航路を開き、ガレオン船による貿易を開始したのは、ポルトガルによる大西洋、インド洋航路の独占に対抗するためであった。もうひとつの出来事は、秀吉の朝鮮出兵のおりに連れ帰った朝鮮人奴隷の転売である。長崎港付近には、ポルトガル船に朝鮮人奴隷を売ろうとする日本人が出没し、また転売できる朝鮮人を探して地方をうろつく仲買人もいたことを、破門令決議書は記している。⁴³

以上の出来事から見えてくる世界史は、岡本が著作の表題に謳う「日欧交通史」ではない。岡本が挙げる歴史事象は、その表題と矛盾している。16世紀後半のポルトガル、スペイン、そして本論では触れなかったがやがて台頭してくるオランダが世界規模で覇権を争う現場、それも東半球のなかの周縁的現場という位置に日本はあり、そのなかで日本の為政者も東アジアの小帝国たらんとして朝鮮に出兵し、アジア貿易への参入を望んでポルトガルの独占を破ろうと画策していた。「日欧」、「東西」を軸とする2極史観に立つなら、世界—東半球—アジア—東アジアという重層的な覇権抗争圏のいずれにおいても労働力の奴隷化と強制的移動があったことは見えない。これが、視覚的にはありありと描かれている黒人図像を不可視化するメカニズムとして働き、南蛮屏風研究言説における黒人の不在となった。

おわりに——視覚イメージの機能と、言説における不在の機能

南蛮屏風に期待され、その期待に応じて画家たちが視覚イメージで構成したスペクタクルは、以上で述べてきたように、当時の世界規模の奴隷化と強制的移動という世界史のなかでこそつくられた。私は南蛮屏風を世界史の傍証として見ようと言いたいわけではない。南蛮屏風にある視覚イメージは、世界史から一元的に規定されているのではない。むしろその視覚イメ

ージそのものが、世界史への関与である。画家と顧客がそれぞれに解釈した「南蛮交易」の意味があり、そこに仮託する夢や欲望があり、それが画家と顧客のもつ諸条件のなかで、当時期待された意味を発揮するものとして具体的な視覚イメージを生み出した。その視覚イメージを成立させるうえで、黒人図像は不可欠であった。

その後長いあいだ、日本の鑑賞者は、ポルトガル人のために働く存在としての黒人をくりかえし見てきたことになる。「日欧の交流」「西洋との出会い」「東西異文化の交流」という枠組みで南蛮屏風を解説する言説の流通は、視覚に映じる黒人図像の意味に鑑賞者の注意を向けさせない方向で機能した。HTLV/HIVのアフリカ起源を言いたい、企みたっぶりの病理学者の曖昧な理論に傍証として利用されたのは、南蛮屏風中の黒人図像ではなく、黒人図像についての言説の不在のほうだったと言えないだろうか。

註

- 1 たとえば次の文献を参照。David Dabydeen, *Hogarth's Blacks: Images of Blacks in Eighteenth Century English Art*, Manchester: Manchester University Press, 1987; Hugh Honour (ed), *The Image of the Black in Western Art*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 1989.
- 2 Robert C. Gallo et als, 'Origin of Human T-Cell Leukaemia-Lymphoma Virus,' *The Lancet*, no.8356, 1983 October, pp.962-963.
- 3 Ibid., p.963.
- 4 Richard and Rosalind Chirimuta, *AIDS, Africa and Racism*, first 1987, London: Free Association Books, 1989, pp.69-70.
- 5 Ibid., p.69.
- 6 Robert C. Gallo, 'The First Human Retrovirus,' *Scientific American*, 1986 December, p.78.
- 7 Robert C. Gallo, 'The AIDS Virus,' *Scientific American*, 1987 January, pp.47-48.
- 8 Gallo, 1986, op.cit., p.86.
- 9 Ibid., p.86.
- 10 Ibid., pp.85-86.
- 11 Shigeo Hino et als, 'HTLV and the Propagation of Christianity in Nagasaki,' *The Lancet*, 1984 September, pp.572-573.
- 12 bid., p.573.
- 13 Ibid., p.572.
- 14 千代田農ほか（長崎赤十字献血センター）「献血者におけるHTLV-I抗体陽性率」『長崎医学会雑誌』73巻4号、1998年、pp.129-132; 木下研一郎ほか「HTLV-Iの母子感染予防策——長崎県離島（対馬・上五島）における成績」『臨床とウィルス』26:3、1998年、pp.142-144.
- 15 David Eltis, 'The Volume and Structure of the Transatlantic Slave Trade: A Reassessment,' *William and*

- Mary Quarterly*, 58:1, 2001, pp.17-46.
- 16 ここに挙げた7つの展覧会が行なわれたのは、順に国立国際美術館、神戸市立博物館、岡崎市立美術館、たばこと塩の博物館、大阪城天守閣、堺市立博物館、岐阜市立歴史博物館である。
 - 17 大阪南蛮文化館と神戸市立博物館はそれぞれ2点の屏風を所蔵するが、ここに人数を挙げたのは、鹿島出版会の総目録番号1番と18番のものである。岡本良知、高見沢忠雄『南蛮屏風』鹿島出版会、1970年。
 - 18 鹿島出版会総目録番号5番、右隻。
 - 19 秀吉が築城した肥前名護屋城に向向き、襖絵などを制作した狩野光信一門が、長崎、平戸まで足を伸ばし、南蛮交易の様子を実見したかもしれないと推測する研究者はいる。しかし、そもそも観察、写生を作画の基本としない絵画文化のなかで、一握りの画家が異人を実見してその経験を描画に反映させたとしても、南蛮屏風に描かれた数多の異人像の由来は他に求めるべきだろう。名護屋城の狩野光信については次を参照。岡本良知「名護屋城図の南蛮人」『国華』915号、1968年、pp.40-46；橋崎宗重「肥前名護屋城図と狩野光信」『国華』915号、1968年、pp.51-60；高見沢忠雄「新発見の狩野山楽系「南蛮屏風」」『古美術』37号、1972年、pp.98-100。
 - 20 岡本良知「南蛮屏風の考察」『南蛮屏風』解説巻、鹿島出版会、1970年、p.62。
 - 21 そういう例として、坂本満氏は、船のマスト上でアクロバティックな動作をしている黒人水夫をあげる。(2007年2月に大阪府立大学「堺・南大阪地域学研究会」で坂本氏を招いて行なった研究会「南蛮屏風研究の現代的意味」での同氏の報告より)
 - 22 坂本満『日本の美術135 南蛮美術』至文堂、1977年；坂本満「南蛮屏風の異国趣味」『近世風俗図譜13 南蛮』小学館、1984年；坂本満「異文化への対応」、日高薫（研究者代表）『南蛮屏風に関する総合的研究』平成14年度～16年度科学研究費補助金、基盤研究（B）研究成果報告書、2005年3月、pp.12-17。このほか、2007年2月に行なった上述の研究会「南蛮屏風研究の現代的意味」において、この論点に関する同氏の詳細な考察に触れることができた。
 - 23 高見沢忠雄「南蛮屏風解説」『南蛮屏風』解説巻、鹿島出版会、1970年、pp.117-187；坂本満『黄金とクルス』小学館、2004年、p.127。
 - 24 岡本良知「南蛮屏風の異国的内容」『史学』19巻3号、1941年、p.84, 87。
 - 25 「南蛮屏風」の語を使った最初の例は、永見徳太郎の『南蛮屏風の研究』（1930年）と思われるが、岡本は20年代から作品の発掘と展示を行ない、南蛮屏風というまとまりある一群の作品として見ることを本格的に始めた。
 - 26 *Ibid.*, p.83。
 - 27 大阪南蛮文化館本が長崎を描いたものであるというのは、岡本良知、高見沢忠雄の説に拠ったものだろう（『南蛮屏風』解説巻、鹿島出版会、1970年、p.118）。辻成史は、宣教師書簡資料との一致を根拠に、同本が長崎開港以前の1562-63年にポルトガル船寄港地であった横瀬浦の出来事を、口伝にもとづいて描いたものではないかと推測している。ただし辻自身、当時まだ来日していなかったフランシスコ会士の存在など、矛盾もあるとしている。辻成史「猪さん、どこから来たの？」『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』第7巻、1999年、pp.89-120。
 - 28 日笠博司「南蛮屏風にあらわれたる南蛮人について」『文学』52巻3号、岩波書店、1984年、p.184。
 - 29 泉万里「南蛮屏風試論」、日高薫, *op.cit.*, pp.18-23。
 - 30 Robin Blackburn, *The Making of New World Slavery: From the Baroque to the Modern 1492-1800*, London and New York: Verso, 1997, p.166。
 - 31 James Walvin, *Questioning Slavery*, London and New York: Routledge, 1996, p.9。
 - 32 David Eltis, *op.cit.*
 - 33 吉田豊「堺の繁栄——南方貿易で栄えた国際都市」『南蛮——東西交流の精華』堺市立博物館展覧会図録、2003年、p.10。
 - 34 角山榮「堺と南蛮貿易」*ibid.*, p.4。
 - 35 岡本良知「16世紀に於ける日本人奴隷問題（上）」『社会経済史学』第4巻3号、岩波書店、1934年6月、p.2。
 - 36 *Ibid.*, p.3；岡本良知『日欧交通史の研究』六甲書房、1936年、p.731。
 - 37 *Ibid.*, p.735。
 - 38 *Ibid.*, p.740。
 - 39 *Ibid.*, pp.735-737。
 - 40 *Ibid.*, pp.752-753。
 - 41 佐久間正訳「帆船サン・フェリーベの難破及び日本26聖人殉教に関するジェスス会の裁判記録（第1部）」『エコノミア』横浜国立大学経済学会、15号、1958年、pp.133-168；佐久間正訳「帆船サン・フェリーベの難破及び日本26聖人殉教に関するジェスス会の裁判記録（第2部）」『エコノミア』16号、1959年、pp.193-228；藤田みどり『アフリカ「発見」——日本におけるアフリカ像の変遷』岩波書店、2005年、pp.35-42。
 - 42 小瀬甫庵『太閤記』には「黒坊250人」、『土佐軍記』には「黒坊300余人」とあることを、藤田みどりが上記著作で記している。*Ibid.*, pp.35-37。『太閤記』は1626年、『土佐軍記』（長曾我部元親の軍功を記した高橋正重『元親記』）は1631年の書物。ただし、上にあげた佐久間訳のイエズス会裁判記録では積荷の内容は明らかではなく、奴隷の存在も記されていない。その理由はわからない。
 - 43 *Ibid.*, pp.33-34；岡本良知、1936年、*op.cit.*, p.763。